戦時下の学校生活

手塚公夫
上鷺宮五丁目

私は小学校一年までは、新潟県の小さな町にいました。ラジオも町に数台しかないという頃です。後に十五年戦争の始まりといわれた満州事変も全く知らずに過ごしました。

東京に越して来て、私は野方尋常高等小学校(現野方小学校)の二年生になりました。ある時学校から、新聞などに載っている天皇皇后のお写真を、切り抜いて持って来るように言われました。そのままにしておくと、足で踏まれたり捨てられたりして、畏れ多いということです。私たちは真面目に切り抜いて持って行きましたが、なぜか一回だけだったと思います。祭日には学校で式があり、いかめしい服装をした校長先生が、教育勅語を奉読されます。内容は分かりませんでしたが、重々しく大事なことなのだと思いました。

三年生の終わり近くの十一年二月二六日、その後の日本の進路に重大な影響を与えた二・二六事件が起きました。殺害された大臣たちの写真や、ラジオの流弾に対する注意、そして「兵に告ぐ」という呼びかけなど、不安な気持ちで聞いたことを覚えています。

四年になる時、北原小学校が新しく出来て、私はそちらに移りました。五年生の十二年七月、中国との間に戦争が勃発しました(日本では長い間、支那事変と呼んでいた)。この頃は、新聞やラジオで報じられるニュースに胸を躍らせました。敵の遺棄死体何千とか、一兵も余さずせん滅などという記事に拍手しました。敵兵もまた血の通った同じ人間なのに、その人間を殺すことの罪悪には、当時は全く思いつかなかったのです。

その年の十二月に首都南京を占領しました。長大な城壁の上にひるがえった日の丸の写真を今でも覚えています。しかし、その旗の下で、十万人以上もの人民を殺した南京大虐殺が行われていたとは、夢にも思いませんでした。生命を軽んじた日本の教育の恐ろしさと、戦争というものの狂気性を思います。

当時は小学校でも、高学年は男女別々の組でした。私たち男子組はすっかり戦争熱に浮かされ、遊びも水雷艦長とか、肉弾戦などがはやりました。同じ学年でありながら、女生徒には近

寄ることもなく、一言も口をきいた記憶はありません。

六年の時の修学旅行では、伊勢神宮に参拝し、奈良、京都をまわりました。私の古いアルバムに、この時の写真が三枚貼ってあります。クラスの人数を数えてみますと丁度五〇人。卒業写真には七二人写っていますから、二二人も旅行に行けなかったのです。国民は貧しく、クラスにはいつも青い鼻汁をたらしている人が何人もいました。

当時の中学校は五年制でした。進学する人は全国では十パーセント位でしたが、学校の数は少なく、また学区制もありませんから、東京中から受験生が集まってきて、現在の受験戦争以上に難しかったともいえます。私の小学校でも進学希望者は、放課後居残って暗くなるまで勉強し、また日曜日には大きな会場に行って模擬試験を受けたりしました。

私は中学校に入学した昭和十四年の九月には、ヨーロッパで戦争が起り、第二次世界大戦が始まりました。一年後には日独伊三国同盟も締結され、私たちも本格的大戦争への気配をひしひしと感じました。

学校へは制服制帽に編み上げ靴を履き、ゲートルを巻いて通いました。掛け鞄は登校の際は右から、下校の時は、左からと決められていました。うっかり間違えた為に、全校朝礼の時、壇上に乗せられ殴られた人さえいました。

学校には現役の将校が配属され、退役した軍人が教官として軍事教練の指導に当たっていました。一、二年生の間は徒手でしたが、三年生からは銃を持っての教練でした。銃は明治三八年式、いわゆるサンパチ銃で重く、殊に冬の寒い朝の教練は大変でした。

毎年一回、軍の高官が来ての査閲がありました。今は色々な競技場になっている原宿の代々木練兵場で、分列行進から始まり、一日中教練の成果を見られ講評されます。この結果が配属将校の成績ともなるので、査閲の前は厳しい空気が張りつめました。

私の学校では剣道が正課でした。全校の寒稽古もありました。冬の朝、校庭で震えながら稽古しました。ある時期、剣道の次ぎが教練と続いた時間割りが組まれたことがありました。剣道の練習が終わり正座して礼をするとすぐ、防具を取ってたたみ、洋服に着替え、防具置場に防具をしまい、走って教室に帰り、教練服に着替え、下靴を履きゲートルを巻く。そして走って武器庫に行き、帯剣をつけ銃を持って整列する。口などきいている暇は全くありません。間もなく改正されましたが、今までで最も忙しかった思い出です。

十六年十二月八日、その日私は中学三年生で、満十五歳になったばかりでした。登校途中ラジオで日本の開戦を知りました。学校へ行っても、みんな強い緊張感の中で、誰も話そうとしなかったことを覚えています。

大戦争が始まっても、私たちの生活が急に変わった訳ではありませんが、何時頃からかスピーカーから「海行かば」が流されるようになりました。「海ゆかば　水漬く屍　山ゆかば　草むすかばね　大君の　辺にこそ死なめ　かえりみはせじ」。大伴家持の歌が信時潔作曲の荘重な曲にのって流れました。ドイツ大使館の武官や日本の海軍士官の講演会もありました。勇敢なドイツ魂が語られ、そして大和魂が鼓舞されたのです。

査閲も行軍形態の査閲に変わりました。十数キロの道を四列縦隊のまま、歩調を揃えて行軍します。全校千人近い隊列の一糸乱れない行軍の有様は見事だったと思います。学校独自の夜行軍もありました。夜、多摩川の川原に集まり、原宿の代々木練兵場に行軍しました。銃を担ぎ寝ずに歩きます。現在の夜の街と違って、街灯が光るだけで他の人の全くいない深夜の街を、黙々と行進しました。途中で駆け足行進もありました。そして明け方代々木に着き最後の突撃をして終りました。

四年の時は、富士の山麓の兵舎での合宿演習がありました。夜真っ暗な中で行動する不気味さ。斥候に出た者が演習が終っても帰らず、照明弾を打ち上げて捜したこともありました。広い原野で無くした弾丸の薬きょうを全員で探したり、走っては伏し、走っては伏して進み、イバラに引き裂かれ血を流しながら突撃したりしました。

私が五年生の十八年十月二一日、東京の全中学校六〇校の五年生が、千葉県下の原野に集まって連合練習がありました。参加した私は、ただ歩き、草に伏し、徹夜し、また歩く。そして突撃の命令で突っ込むと、突然前に敵が現れ演習が終りとなりました。そして長い道を歩いて集合地に行ったところ、どこにいたのかと驚くほどの人が集まっていました。僅か二日間でしたが、私はすっかり疲れてしまいました。

同じ二一日、東京の神宮外苑では、東条首相出席の下、出陣学徒壮行大会が開かれていました。理工科系以外の学生の徴兵猶予が撤廃され、文化系の学生は皆入隊することになったのです。戦局は日々日本の不利となって来ていたのです。

クラスの中からも何人かが予科練（海軍飛行予科練習生）に志願して行きました。その友人の入隊を見送った、品川駅頭の光景を忘れることが出来ません。集まった若者で広場はぎっしりと埋まり、軍歌と校歌と歓声、興奮のルツボでした。

私も出願を決意し、願書を出してから親に話しました。父は一言も言わず、母は「おまえも行ってしまうのかえ」と震え声で言いました。「若い血潮の予科練の…」の歌が街を流れる中、検査場へ行きましたが、視力不足ではねられました。孫もいる今頃になっても、あの時の父と母の心の中を思うと胸が痛みます。

色々なことが有りながらも、学校の授業は変わりなく続けられていました。勤労動員も年に一、二回、二週間程度のもので、

受験勉強もしていました。校内の模擬試験があり、成績が張り出されるのです。進学者の志望は理工科系に集中しました。

十九年四月、私は工業専門学校に進学しましたが、勉強に専念できたのは一学期間だけでした。夏になると強制疎開された家屋の取壊しや片付けに動員されたり、農村へ稲刈りの手伝いに行ったりしました。農家に泊まり、そこから毎日違った家に手伝いに行きました。

みな出征兵士の家で、手不足で困っていた家です。慣れない稲刈り作業は、腰が直ぐ痛くなり、一生懸命やっても農家の主婦にもかないませんでした。昼食は行った先で御馳走になったのですが、ある家でお菜として出された鮭は真っ白で、塩の塊のようでした。しかし、ご飯は白い米飯。精一杯の御馳走だったのでしょう。この時の小さな白い鮭の一切れが、四七年たった今も目に浮かんで来ます。

農村から帰って来ると、ある部隊の緊急の要請で、電波探知機の教育用掛図の制作にかかりました。レーダー兵養成のため配線図を大きく書く作業です。二日間夜遅くまで従事し完成させました。そしてその後、私たち全員は学業から全く離れ本格動員されました。飛行機製作の工場が主でしたが、浅川(高尾)の地下工場建設のため、穴堀りに行った人もいました。

二〇年の冬は実に寒い冬でした。一月は三一日間、すべて氷点下になりました。このようなことは明治に二回、大正に一度あっただけといいます。夜勤の工場はしんしんと冷えこみ身にこたえました。空襲で電車が不通になった時は、家まで歩いて帰ったこともありました。理工科系の徴兵猶予も撤廃され、また徴兵年齢も下げられたため、クラスの半数は入隊して行きました。学校の名はあっても実体は完全に消滅していました。

戦局の悪化、空襲の激化とともに、私たちの生活は真綿で首を締められるように息苦しく、また緊張の連続の日々となっていました。そして私は「もう一度ゆっくりお風呂に入ってみたい。のんびり散歩してみたい」と痛切に思ったものです。

今、あのころの学校生活を振り返ってみますと、私たちは極めて視野を狭められた馬車馬のようだったと思います。人間として思考し判断するのに必要な情報が、決定的に不足し、また歪められていました。天気予報さえ禁止されていたのです。

私が中学二年生の十五年十一月、紀元二千六百年の式典が皇居前広場でありました。今の人は二千六百年とは何のことか分からないでしょうが、神武天皇が即位の式をあげられてから、つまり日本が建国してから二千六百年たったということです。その頃の日本上代の歴史は神話に基づいたもので、正確な史実ではなかったのです。しかし、当時の私は疑いもしませんでした。数年前、古事記を読んで驚きました。始めて読んだのに、書かれていたことの大半は知っていたのです。皇国史観の教育で教え込まれていたのでしょう。

中学五年のある日、担当の先生が休まれ校長先生が来られたことがありました。その時先生は「君たちは、天孫降臨の神話を信ずるかね。落下傘でもつけて降りたのかな」と話しだされました。すると教室内に、緊張した異様な空気が流れました。それを感じられたのか先生はそのまま口を閉ざされました。あの時先生は、何をおっしゃりたかったのか、そして私たちの反応は何だったのかと、今も思い出します。

「言論の自由」は、本当に大切なことと思います。戦前、自由な報道がなされ言論の自由があったなら、あの戦争も防ぐことが出来たのではないかと私は思います。

平和な今、若い人が非行に走ったり、犯罪を犯したり、麻薬に耽ったりするのは、「平和」に申し訳なく、また勿体無いことと思います。